

私の情念

中川 修

小説に、『博士の愛した数式』や『真夏の方程式』のように数学用語を題名としたのが目に付く。この場合の「数式」の意味は、言葉の論理が数式で示せるとの感覚の論理と浅はかに決めてしまい。「方程式」は、メタファーな意味での問題解決のためのソリューションのことと理解する。私の情念の生起は、これらの小説の題名に使われている「数式」と「方程式」の峻別の結果である。

峻別の意味するものを数理モデルの方程式の解とし、帰結でき得ることの代償による情念の発生過程の物語である。しかも、完全に帰結でき得れば、情念は、霧消できると信じたい。

まず、情念そのものが何かを特定すべく、デイヴィッド・ヒュームの『理性は、情念の奴隷であり、ただそれだけであるべきである。』を命題として、理性が何たるものかを若干、定義してみたい。アリストテレスの『理性は、神が魂に点火した光なり。』これにおいて、神は、自然 魂は、徳として捉えていくことにする。

『ヒューム哲学における情念と倫理』を考察した 奥田太郎氏の博士論文の要旨を適用させて頂くとすれば、ある行為、ここでは、数式を使うこと。

『この行為の動因が、自然的・人為的という徳の二分法の内実は、行為、動機、性格特性間の関係である。』と捉え、この作業が、『特定個人の特殊な利害と無関係に一般的に考慮される場合に生じる情念』としての道德感情という従来の理解』を『三者以上の間での共感を通じた情念と快のやりとり（情念システム）を通じて、穏やかな間接情念である是認の情念（すなわち道德感情）へと変化』すべき事への障害から起因するこの行為そのものであるとして行く。

この行為が、人為的であるならば自然的になることが、『是認の情念』であると主張できるのではないかを解き明かして行きたいのである。

何故、私の情念が、『是認の情念』と認知され得ないかを分析していくことにする。

「郷に入っては、郷に従え」の格言がある。

土地の交換分合による区画整理の換地の行為を数式で説明する時、「郷」の情念が、端的に、理性と至らしめていることの解放を目指そうとしたなら、学問的に認識できる事とのズレが、私の情念を生み出していると言えばそれまでだが。

数式の何たるかを、『情念システム』を適用して、科学的に論理の裁判を試みたい。もちろん、法が存在する前に、『理性は、神が魂に点火した光なり。』等を念頭に、『三者以上の間での共感を通じた情念と快のやりとり』などを倫理観として裁けないかに焦点を絞って審理し、判決しようとするものである。

数式の認識を等価性で認識されることの原因（犯人）が、量化であると突きとめられたことである。等価性を全称量化に求めれば、土地の価格値の等価しかならないのを「郷」の掟に従えば、人為的評価の行為に、『是認の情念』が生まれ得ないからである。

数式が、方程式であるための『情念システム』の取り扱いが『是認の情念』への変換と生るべく筈なのだが、作為的なバイアスを施してしまって、数式を使うことを、「郷」の情念としているからである。

これは、全称量化の数式なのである。しかも、別の数理モデルとして存在量化の数式もあるのである。これらを、統一的・学問的に認識すべき時、「郷」の情念では、『是認の情念』へと変化し得ないのである。

デイヴィッド・ヒュームの『理性は、情念の奴隷である。』の対偶命題「情念でないもの（情念の解放）は、理性でない。」前者が、偽りなら、後者も偽りである。ここで、「郷」の情念に逮捕状を突き付けなければならないのである。

しかしこれには、全くと言っていいくらい施行規程に表記されている事を、数式にすべき時に全称量化の蓋然性が示されてしまうので「逮捕状」を請求できないのである。規範モデルを、統一的・学問的に認識しようとする法（規程）の壁を破らなければならないのである。

この壁を突き進むには、量化なる概念を取入れることで、『情念システム』を通じて『是認の情念』へと判決しようとする「論理の裁判」を戯曲型式で開廷する。

原告は、数式の論理的思惟者・・・量化 人

被告は、数式の適用者・・・「郷」の情念 人

裁判所は、理性の判断者・・・『是認の情念』 人

裁判人は、言葉の定義者・・・『情念システム』 人

原告の準備書面

論理裁判所 御中

申請人 量化

住所 不定 (国語辞典に掲載されていない。)

氏名 量化

事件番号

平成二十七年（論

） 第一号

事件名

「量化」認知事件

申立人

量化

相手方

「郷」の情念

終局日

平成二十七年十月

被告の答弁書

事件番号

平成二十七年（論

） 第一号

「量化」認知 請求事件

原告

量化

被告

「郷」の情念

答弁書

論理裁判所

御中

被告

「郷」の情念

第一

請求の趣旨に対する答弁

平成二十七年四月三十日

一 原告の請求を棄却する。

第二 請求の原因に対する認否

一 原告そのものを不知

第一回 証人尋問

『情念システム』人

「数式の何たるかを教えてください。」

『数学』人

「数式と数式を等価記号で結合することは、左辺の量（値）と右辺の量（値）が等価であることを表しています。そして、等価記号を含めて、数式としています。」

第二回 証人尋問

『情念システム』人

「数式と数式を等価記号で結合された時、論理的にはどのように生るのですか。」

『論理学』人

「数式と数式が等価記号で結合されている時、その数式を適用する範囲には、ある普遍的な定数が見出されます。」

『情念システム』 人

「その普遍的な定数には、どんなものが在りますか。」

『論理学』 人

「数式と数式の結合論理により、全称量化定数と存在量化定数があります。」

第三回 証人尋問

『情念システム』 人

「数式と数式の結合論理により、『論理学』人より、普遍的な定数があると分かりましたが、数式としては何を意味しますか。」

『数学』 人

「論理命題が数式と数式の結合で表され、定数が現れた時、その数式は、方程式になります。」

第四回 証人尋問

『情念システム』 人

「論理命題が数式と数式の結合で表され定数が現れた時、『数学』人より、それは方程式であると分かりましたが、その方程式で持つてある現象から他の現象を結合した時、他の現象の方程式を解くには何が必要ですか。」

『科学』 人

「ある現象を表した数式から、他の現象の数式に結合するには、演算子が必要です。そして、演算子を呈示しています。」

第五回 証人尋問

『情念システム』 人

「ある現象を表した数式から、他の現象の数式に結合するには、『科学』人より演算子が必要と分かり呈示されましたが、数学的にはどう言う意味になりますか。」

『数学』 人

「ある現象を表した数式から、他の現象の数式に結合できる演算子が演繹できたなら、他の現象の数式には、作用素が確認できます。」

第六回 証人尋問

『情念システム』 人

「論理命題が数式と数式の結合で表され定数が現れた時、『数学』人より、それは方程式であるとは分かりました。そして、ある現象を表した数式から、他の現象の数式に結合できた時、『科学』人より演算子が呈示され、それは、『数学』人より、作用素で表現できると分かりましたが、それぞれの現象の数式と数式の結合されたことから何が認識できましたか。」

『科学』 人

「数式と数式の結合論理により、三つの数理モデルに生ると分かります、そして、ある現象の既知値から他の現象の数値を求めた時、ある(元の)現象の数式が何を意味しているか認識できます。」

『情念システム』 人

「ある(元の)現象の数式は、どんな意味をもっているのですか。」

『科学』 人

「ある(元の)現象の数式は、その事象での現象の等価性を数式に現れる量化定数によって結合された上での等価式であります。」

『情念システム』 人

「量化定数によって結合された上での等価式とは、どういう意味ですか。」

『科学』 人

「現象を記述したある(元の)事象の数式は、量化式であるという事です。」

『情念システム』 人

「量化式であるという事は、他の事象との数式とどんな意味を持つのですか。」

『科学』 人

「ある現象を表した数式から、他の現象の数式には、翻って、ある（元の）事象を表した数式と他の事象の数式とは、辻褃が合っていることが認識できます。」

第七回 証人尋問

『情念システム』 人

「ある（元の）事象を表した数式と他の事象の数式とは、辻褃が合っていることが認識できると、『科学』人は、言っていますがこれはどう言う意味ですか。」

『数学』 人

「ある（元の）事象を表した数式と他の事象の数式とが、辻褃が合っているということは、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式が閉じた形になります。だから、ある（元の）事象の数式も他の事象の数式も方程式と認識されます。」

『情念システム』 人

「ある（元の）事象の方程式と他の事象の方程式が閉じた形であるとの意味はどう言う事ですか。」

『数学』 人

「ある（元の）事象の方程式と他の事象の方程式は、双対している事です。」

『情念システム』 人

「方程式は、量や値を文字記号で表し、閉じた形を示されますね。」

『数学』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「方程式の指し示す量や値を実際には、決められないのです。何故ならある実在可能な数値（有効数字）になるので、その場合どういふことになりますか。」

『数学』 人

「ある現象を表した数式や、他の現象の数式は、誤差を含む数式として、取り扱う事しか出来ないですね。」

『情念システム』 人

「数学的厳密性というか、そういうものを具現できないことが分かったのですが、『数学』人から現実の科学の領域で感じることはありますか。」

『数学』 人

「量や、値を決めるとかにおいて、『数学』人は、どこまでも、どこまでも

追い求めることが出来ますが、科学はある意味、量や、値を決めるとかを量化して考えねばならないことですか。」

『情念システム』 人

「量るとか値を決めるとかを量化して、とおっしゃいましたが、数理モデルからの方程式からの数値等を決める事を量化ということですか。」

『数学』 人

「量化には、二つの意味があります。一つは、数理モデルから、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式とが、閉じた形でそれぞれの事象の方程式が互いに双対しているのを示すのが、量化です。」

「もう一つは、閉じた形で示された方程式から現実の量や、値を決めるとかの数値に置き換える過程も、量化と生ります。」

第八回 証人尋問

『情念システム』 人

「言葉の意味としての量化には、『数学』人から、数理モデルの方程式を見出すことと、その方程式から現実の量や値とかを決めることに使うことと、二通りの使い方があったと分かりましたが、そうですか。」

『科学』 人

「いいえ、量化には、もう一つのことを加えねばなりません。」

『情念システム』 人

「もう一つのこととは、何ですか。」

『科学』 人

「もう一つのこととは、見出せる方程式に入力する量の値や値の数値が自然であるか作為であるかで、量化という言葉が必要になります。」

『情念システム』 人

「量化という言葉が必要になりますとは、どういう意味ですか。」

『科学』 人

「入力する量の値や値の数値は、自然な物理数と人為的な指標数とがあります。指標数はある現象を表す事象のみで構築すべきものですが、如何やら、ある現象を表した数式から、他の現象の数式の結果をも考慮する人為的な指標数とならしめているようなら、入力する数値そのものも量化の言葉に包み込まれます。」

被告尋問

『情念システム』 人

「土地の交換分合による区画整理の換地の行為は、数式を使って行われていますね。」

『郷』の情念』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「その数式は、どのようなものですか。」

『郷』の情念 人

「施行規程に表記されている事を、数式として具現化したものです。」

『情念システム』 人

「その数式をどのように理解していますか。」

『郷』の情念 人

「区画整理による土地価格の値上がり分の公平な配分と考えています。」

『情念システム』 人

「値上がり分の公平な配分は、区画整理に必要な減歩を伴うのですね。」

『郷』の情念 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「土地価格の値上がり分の公平な配分の数式でもって減歩を生むことですね。」

『郷』の情念 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「土地価格の値上がり分の公平な配分の数式は、『論理学』人より、数式と数式の結合論理により、全称量化式と存在量化式があると言っていますが、如何なのですか。」

『郷』の情念 人

「数値と数式の結合により、地権者の合意形成が図れる土地価格の指標を決めます。合意形成とは、地権者への納得できる減歩と理解しています。」

『情念システム』 人

「使われている数式は、全称量化式との認識はないのですか。」

『郷』の情念 人

「値上がり分の公平な配分としての数式と認識しています。」

『情念システム』 人

「その数式は、なんと言いますか。」

『郷』の情念 人

「権利価格と申します。」

『情念システム』 人

「権利価格とは、地権者との合意形成の下に作られていますね。」

『郷』の情念』 人

「……。」

「いままでの数式の提唱人の規範モデルとしての分析資料を開示します。」

第九回 証人尋問

『情念システム』 人

「権利価格と規範モデルの分析資料の開示を『郷』の情念』人より受けましたがその資料でどういことが分かりますか。」

『科学』 人

「実証的資料がないので、どのように数式を使うのか分かりませんが、科学的な方法とは、の問いに、森博嗣氏の【他者によって、再現できる。】との数式の使われ方をしているかを確認できませんでした。」

『情念システム』 人

「権利価格という数式で地権者との合意形成を含蓄して使っていると『郷』の情

念』人は、言っていますが、これは、『数学』人の言っている量化の二つの意味とは違うのですか。」

『科学』 人

「はい、違います。」

『情念システム』 人

「権利価格という数式に、数式そのものの意味より入力値そのものを考慮している事ですか。」

『科学』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「『郷』の情念』人が 開示した規範モデルの数式の等価性は、権利価格との理解に止まっているのですか。」

『科学』 人

「はい、そのように見受けられます。」

『情念システム』 人

「それは、どういう意味ですか。」

『科学』 人

「権利価格式は、価格事象の数式と言い、減歩率式は、面積事象の数式と言います。」

「権利価格式と減歩率式は、閉じた形として証明してこそ、それぞれの数式を方程式として認識できるのですが、そのことを示されているとは思われません。」

『情念システム』 人

「『郷』の情念』人が、権利価格式に対して、鉛筆を舐めるとの言葉を口にするのですが、どういう意味とお思いですか。」

『科学』 人

「権利価格式を量化式と捉えないので、量化価格値を確定できないことに起因することです。」

『情念システム』 人

「『数学』人より、量化には、二つの意味があり、一つは、数理モデルから、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式を閉じた形に示し方程式とすること、もう一つは、閉じた形で示された方程式から現実の量や、値を決めるとかの数値に置き換える過程も量化と言うことですが、『郷』の情念』人は、権利価格式が決められた入力値に閉じた形を示すことを無視して入力値そのものを考慮していませんね。」

『科学』 人

「はい、そのように見受けられます。」

『数学』 人

「規範モデルを数理モデルとして数式にされた時、数式そのものに何らかの作為的なバイアスを施すことも量化となってしまう。」

『情念システム』 人

「『数学』 人の言われた二つの量化の意味とは、異質のものです。」

『数学』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「規範モデルを数式に置き換え数理モデルとなれば、どう言うことを意味しますか。」

『数学』 人

「規範モデルに内蔵されるものは、とり削がれ単なる数値や量の値の入力値としてしか認識しません。」

『情念システム』 人

「規範モデルが数理モデルに視点が変わると言うことですか。」

『数学』 人

「規範モデルが数理モデルとなれば、全称量化式が存在量化式になると言

うことです。」

『情念システム』 人

「規範モデルに内蔵されるものを、全称量化式で取り扱うとどうなりますか。」

『数学』 人

「全称量化式の量化定数に作為的なバイアスを施すことになってしまいます。」

『情念システム』 人

「作為的なバイアスというのは、数学的にどういう意味ですか。」

『数学』 人

「数式以前の問題で、『数学』人としては、あずかり知らないことです。」

『情念システム』 人

「全称量化式と存在量化式との分析において、バイアスは、どう言う意味になりますか。」

『数学』 人

「バイアスの値は、存在量化式では量化の動因になり変数に掛かる存在量化定数そのものを数式が生み出します。全称量化では、分析には関与していないと言うか、変数に取り込まれ、変数のゲージ化になります。従って、変数のゲージ変換により存在量化の他の現象の数式の擬似化になります。」

『情念システム』 人

「『郷』の情念』人が、全称量化式の定数のバイアスの値で量化しているのを存在量化の数理モデルの数式ではどのように生っていますか。」

『数学』 人

「先ほど言いました通り、存在量化では、バイアスの値は量化の動因であり、数式そのものが、ある（元の）事象の量化を示し、他の事象の数式はこれに双対したものを示してくれます。」

『情念システム』 人

「全称量化式と存在量化式との分析で全称量化式のバイアスの値は、ある（元の）事象を表した数式と他の事象の数式との間で、ある（元の）事象の量化による方程式との認識においてどの様な事が分かりますか。」

『数学』 人

「全称量化式において、ある（元の）事象を表した数式から他の事象の数式への量化による方程式の演算子は、存在量化式の一つの量化と同じ演算子と生ります。従って、バイアス値は、数学的には、量化には関与していないのが分かります。これは、変数のゲージ化を意味します。」

『情念システム』 人

「同じ演算子と生り、バイアス値は、『数学』人の言う量化には関与しないとの事ですが、『科学』人の言う『郷』の情念』人の権利価格式への入力値の取り扱いも量化となるこの意味においてどんなことが言えますか。」

『数学』 人

「入力値の取り扱いも量化となると言う事は作為であり、さきほど証言した通り数式の取り扱い以前の問題になります。」

『情念システム』 人

「全称量化式において、数式の取り扱い以前の問題と言う事は、バイアスの値が作為に生ると言う事ですか。」

『数学』 人

「作為に生るとか生らないとかではなく、バイアス値は、全称量化式において、ある（元の）事象を表した数式から他の事象の数式を繋ぐ変数をゲージ変換するものに生ります。」

『情念システム』 人

「バイアス値は、全称量化の数式で『郷』の情念』人の言う権利価格の定数と生るものですが、どういう意味ですか。」

『数学』 人

「数学的には、全称量化式の量化定数としてしか、認識できません。つまり、変数のゲージ変換に作用するものです。」

『情念システム』 人

「『数学』 人よりバイアス値は、数学的に全称量化式の量化定数としてしか、認識できないとの事ですが、このまま全称量化式を使うと言うことはどういう意味になりますか。」

『科学』 人

「『郷』の情念』 人の言う規範モデルとしての作為の掛ったバイアスの値を用いて数理モデルとした時、量化は、結果として、ある（元の）事象を表した数式から他の事象の数式への方程式としての量化の認識は、二つの事象を結合する変数が直接的に関与することになります。」

『情念システム』 人

「変数が直接的に関与するとの意味はどう言う事ですか。」

『科学』 人

「ある（元の）事象において、バイアスの値の値倍で持って、ある（元の）事象の現象が等価になると言うことですから、変数そのものが、ある（元の）事象の現象の変化をも示すことに生ります。」

『情念システム』 人

「バイアスの値が作為として捉えると、全称量化式と存在量化式の比較においてどのような意味になりますか。」

『科学』 人

「バイアスの値により、存在量化式の他の事象の方程式への擬似的なものを結果として模索したことになります。」

『情念システム』 人

「ある（元の）事象の現象は、どのように擬似されることになるのですか。」

『科学』 人

「ある（元の）事象の現象のバイアスの値は、ゲージ変換に作用する見返りに、二つの事象を結合する変数そのものが、増進を擬似するものになってしまいます。」

『情念システム』 人

「ゲージ変換に作用する見返りに、とはどういう意味ですか。」

『科学』 人

「バイアスの値の作用による変数のゲージ変換により、ある（元の）事象において、先ほど、言いましたように、バイアスの値の値倍で持って、また等価式に変換されるというか、戻ってしまう事です。」

『情念システム』 人

「バイアスの値そのものの決定において、他の事象の数式を見定める作為があるということはどう言うことになりますか。」

『科学』 人

「【他者によって、再現できる。】との『科学』人の心構えが『郷』の情念」人の言う規範モデルの設定の仕方です。同一の数式に生らないことがあります。」

原告尋問

『情念システム』 人

「『郷』の情念」人は、使われている数式が全称量化式と認識していないようですがこの数式を如何思われますか。」

『量化』 人

「『科学』人より示された存在量化式の一つの演算子と同じであるから、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式が方程式と認識された時、ある（元の）事象の数式を現象として捉えるのは、二事象を媒介する、変数値そのものが、擬似することになります。」

『情念システム』 人

「ある（元の）事象の現象は、変数値そのものが、擬似することになると言う事ですが、他の事象の数式においてはどのような意味になりますか。」

『量化』 人

「他の事象の数式の現象も存在量化の他の事象の方程式の結果に擬似されることになります。」

『情念システム』 人

「全称量化式の量化定数が作為的なバイアスの値で在るなら、存在量化式とはどのような関係になりますか。」

『量化』 人

「ある（元の）事象の数式と他の事象の数式が方程式と認識された時、二つの事象を媒介する変数を同一のゲージとして取り扱えません。」

『情念システム』 人

「変数を同一のゲージとして取り扱えませんとの事ですが、これは、どう言う意味ですか。」

『量化』 人

「二つの事象を媒介する変数が同一のゲージでないことは、他の事象の数式である減歩率式の比較は、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式のそれぞれの中央値を重ね合わせての減歩率式の傾向を認識する事になります。つまり、オフセットな傾向を認識する事です。」

『情念システム』 人

「他の事象の数式である減歩率式の比較で、全称量化式と存在量化式においての二つの事象の間の、ある（元の）現象の変化はどのような意味になりますか。」

『量化』 人

「全称量化式の量化定数が作為的なバイアスの値としての数式の取り扱
いなら、存在量化式への擬似化であります。」

「二つの事象を媒介する変数はゲージ化されてしまうのですが、存在量化の量化式
に相当する全称量化の見掛けの増進を変数値が、示す事になります。」

『情念システム』 人

「全称量化式の数式の使われ方は、例えば、機械的というか電子回路
の素子の様なものとなっているのですか。」

『量化』 人

「『数学』 人の言う量化の意味でなく、バイアスの値の根拠となる数値や
量の値 そのもので量化をしているから、数式を素子として考えれば何の働きもし
ていません。」

『情念システム』 人

「存在量化式の場合は、どう言う意味を持っていますか。」

『量化』 人

「バイアスの値の在る事が量化の動因であり、量化式そのものが、素子
の機能を生み出し二つの事象を媒介する変数に働きかける存在量化定数を示して
くれます。」

『情念システム』 人

「全称量化と存在量化との量化の違いは、バイアスの値で量化するか、

量化式そのもので量化しているか、と仰うことですか。」

『量化』 人

「全称量化の場合、バイアスの値が人為的な作為した値なら、あくまでも、変数のゲージ変換であり、作為のあるバイアスの値で存在量化に擬似させているのです。」

『情念システム』 人

「全称量化の数式のバイアスの値を人為的な作為した値で数式を使うなら、存在量化の数式を使わなければならないと仰うことですか。」

『量化』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「全称量化の数式のバイアスの値を人為的な作為した値で数式を使うのはどういう場合ですか。」

『量化』 人

「ある（元の）事象の数式は、評価事象の数式ですが、この事象での等価から大きく乖離すると『郷』の情念』人のいう【地権者の合意形成が図れる土地価格の指標を決めています。合意形成とは、地権者への納得できる減歩と理解しています。】との事でバイアスの値を人為的な作為した値で数式を使うこととなります。」

『情念システム』 人

「量化作用を人為的にするか、存在量化の数式に任せると言う事ですか。」

『量化』 人

「はい、そうです。」

「評価事象の土地価格の指標を真摯に扱うなら存在量化の数式に任せるべきです。」

『情念システム』 人

「土地価格の指標を真摯に扱うとは、どう言う意味ですか。」

『量化』 人

「他の事象の数式である面積事象への量化作用を押し量って、土地価格の指標を扱うことが、真摯でないことです。」

「今、言いました扱いを排除することが、真摯さを守る事です。」

『情念システム』 人

「量化作用を数式で扱うなら、譬え、入力値が、人為的な土地価格の指標で あるけれども真摯さは守らねばならない、とりもなおさず、作為で在ってはならないと言う事ですか。」

『量化』 人

「はい、そうです。」

『情念システム』 人

「真摯さを守る事とは、どう言う意味ですか。」

『量化』 人

「この真摯さを守ることで、二つの事象を媒介する変数は、作為的なゲージ変換のない状態で分析できます。」

「とりもなおさず、規範モデルを数理モデルへと正直に導くことが出来ます。」

『情念システム』 人

「正直とは、具体的に何を意味しますか。」

『量化』 人

「『郷』の情念』人の数式である権利価格の比例係数は、作為のないバリアスの値で在ると言うことです。」

『情念システム』 人

「バイアスとゲージは全称量化式と存在量化式とにおいて、どんな働きをしていますか。」

『量化』 人

「バイアスの値は、全称量化式と存在量化式とにおいて、共通の視座のもとに決められる外生因子であります。」

「従って、バイアス値の作為は、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式を繋ぐ変数に掛かるゲージの値を人為的に決めることになる事です。」

「繰り返し、繰り返し、言っているように、バイアス値の作為が在る限り、全称量化式と存在量化式のある（元の）現象の数式と他の現象の数式を同一のゲージの変数として扱えない事です。」

『情念システム』 人

「全称量化の他の現象の数式の分析は、存在量化式の変数の中央値からの現象の傾向の擬似になると言う事です。」

『量化』 人

「はい、そうです。」

判決

主文

量化を認知し容認する。

理由

第一回、第三回、第五回、第七回、第十回におよぶ『数学』人の証人尋

問より数式の何たるかについて、次のように証言を得た。

一、第二回の『論理学』人の証言より数式と数式を等価記号で結合すれば普遍的な定数を認知し全称量化式が存在量化式に生る。

一、ある（元の）事象の数式と他の事象の数式が閉じた形であれば夫々の事象の数式は方程式と認識できる。

一、二つの事象の方程式が双対することを量化と言う。

一、二つの事象の方程式を現実の数式に示し得ないので誤差を含んでしか扱えず、この数式を作ることにも量化の意味になる。

第四回、第六回、第八回、第九回、第十一回におよぶ『科学』人の証人尋問より数式の科学的分析が何たるかについて、次のように証言を得た。

一、量化式から減歩率式を導くには、演算子が見出せる。

一、『郷』の情念』の数式は、全称量化式の数式で在るが、量化式との認識をせずに作られた権利価格式である。

一、量化の意味において『数学』人の量化の認識以外に数式の入力値である指標数値も量化になる。

一、指標数値も量化になることで、使用している数式の定数が人為的なバイアスの値である。

一、全称量化式の見掛けの現象を捉えるものは、量化式と減歩率式を結合する変数値そのものになり、減歩率式は、存在量化の減歩率式にゲージ変換されて擬似されたものになる。

一、全称量化の減歩率の変化は、結合する変数がバイアス値によりゲージ変換されるので、減歩率式の中央値からの変化傾向を認識する事になる。

『数学』人、『論理学』人、『科学』人、『郷』の情念』人、『量化』人の証言内容より、これらを総合的に大統一するのに、どんな理性であれば良いかを下す。

理性は、共通の情念によって支持されるものである。『郷』の情念』人の数式の使い方が権利価格式との認識のみで定数を人為的なバイアスの値で容認することは、『郷』の情念』の中で確立された理性である。

この数式は、全称量化式であり、存在量化式を含めて解析学的に数式として検討する時、規範モデルとしての人為的なバイアス値は、数理モデルとしての解析には、作為的な変数のゲージ変換になる。

『郷』の情念』の開示した規範モデルの数式の解析は、評価事象にとどまり、バイアス値の確固たるモノ（本質）を分析できていないのである。

数理モデルとしては、『郷』の情念』人の言う権利価格式は、全称量化式の量化価格式である。

しかし、権利価格式を『郷』の情念』人は、量化価格式と認識していないし、面積事象の減歩率式とも閉じた形を確認することもなく使用している。

そのため、『鉛筆を舐める』との事柄の真の意味をも理解していない。『鉛筆を舐める』というのは、数理モデルから解析学的には、真の、量化価格式は方程式として呈示出来るが、現実には有効数字をもつ数値からの数式しか扱えないことである。

『科学』人は、閉じた形の量化価格式を捉えて権利価格式を極め得るが、『郷』の情念』人は、権利価格式からの試行錯誤で極め得るに過ぎず、数理モデルに視座が移らな

い規範モデルのバイアスの値を削ぎ得ているのである。

ところが、規範モデルが数理モデルへと視座が移ったなら『郷』の情念』の使用している数式は、全称量化式であり、全称量化定数の意味がバイアスの値であるとの視点が得られるのであるが、それに到達し得ないのは評価事象からのみの考察であるからである。

『郷』の情念』の統轄下の理性は、『郷』の情念』の数式の使い方として規範されるバイアスの値が量化の行為であり、作為される変数は、ゲージ変換され、評価事象の見掛けの変化現象を変数値が捉えているとしているのである。

以上の審理から、より大いなる統一を目指す、理性は、デイヴィッド・ヒュームの『理性は、情念の奴隷であり、ただそれだけであるべきである。』の命題の真偽の崇高さを高めるのは、『郷』の情念』で形成する理性が、奥田太郎氏の言う情念システムの『三者以上の間での共感を通じた情念と快のやりとりを通じて、穏やかな間接情念である是認の情念（すなわち道德感情）へと変化』するため、

量化の言葉の意味の内容は、『数学』人、『論理学』人、『科学』人の証言したのを、容認する。

ここにおいて、『郷』の情念』の理性は、より大いなる統一の『是認の情念』へと変化出来るのである。

バイアスの値が人為的作為を施しているなら『郷』の情念』人の権利価値式は、存在量化式に代えて量化すべきである。

以上

『市井』の声

斯界の数式を使うことの行為の動因が、自然的・人為的という徳の二分法の内実は、金重明著の『十三歳の娘に語るアルキメデスの無限小』の中の『ダブルスタンダード』の意味をお借りして、自然科学と社会規範とではその根幹の情念が論理的理性になるか、ならないか、ということである。

自然科学（数学）におけるの理性は、人類に共通な根幹の情念で理性の中の理性であると主張できるのである。

しかし、社会科学（規範）での理性は、人類に共通な根幹の情念としては疎ましくそのものから出てくる論理は、この時代の歴史に委ねられた産物であるのである。

また、数学を敢えて自然科学と離れた視点で数学的論理を自然科学に押し広めたとき、数学的等価は、自然科学においては、量化としての等価であることを強く、認識しなければならぬ事である。

西田幾多郎没後七十年に当たり改めて、『善の研究』の端々の言葉を思い起こさせていただいて述べると、

『我々の真摯なる要求は我々の作為したものではない、自然の事実である。』や『深く考える人、真摯なる人は必ず知識と情意との一致を求むる様になる。』を「抛り所」に被告である提唱人の数式の規範モデルを数理モデルとして解析したなら、先に記した『ダブルスタンダード』の使い方が、社会規範と自然科学との適用において如実に判るのである。

しかも、論理の裁判で明らかにしたように『ダブルスタンダード』を踏まえた規範モデルの数式の解析の不十分さ故の思い込みから、真の数理モデルへと昇華しきれなかったために、離散的に双対できる評価事象と面積事象とのそれぞれの関数の場

を橋渡しするモノの本質を見出し得なかったのである。因みに、西田幾多郎書の

『物となって考へ物となって

行ふ 西田幾多郎書』

の物は、私の考察したモノと置き換えて思惟してよいのではないかと示唆している。

モノの気づきとして、もうひとつ、

森田真生先生は、岡潔の言葉の

『数学は、自然数の最初の「1」について何も説明できない。』

『なぜその最初の「1」は存在するか。』

『最初の数「1」とは何か。』

の『情緒』にある「つかみとる」モノのひとつとして、

この「1」なるモノが、二つの集合の双対性においてこの方程式の係数の存在量
化定数と作用素の和または積が、「1」に生ることが分かった事だ。私は、集合の
もとじめとして表すことが出来ている「1」が、数学的な「1」を表意していりよ
うな気がしてならないと認識する。余談ではあるが、神道における「荒魂」と「和
魂」を、数学の「1」の風景として市井の方がたに眺めていただくべく「荒魂」に
相当する【量化】の言葉を国語辞典に載せていただくよう「一言主神社」にお願い
している。叶えられれば「和魂」としての「1」の風景が共有されるのではないかと
胸を弾ませている。

話は戻して、

『思惟、想像、意志、の作用よりの統一せる活動』から論理を数式とした時、全称量化と存在量化の二つの思惟が生まれるのである。このことから、

『如何に考え、如何に想像し、如何に為すべきかを論ずるのが、第一の問題である。ここにおいて論理、審美、倫理、の研究が起って来る。』を思惟し、

そこで、論理としては、現象の解析の結果、評価事象から面積事象への変換には演算子が見出されたのである。そして、面積事象の変数の係数は、作用素で示され、減歩の割り当て（積分）量と生るのである。

そこから、評価事象の離散量を表す量化式の量化係数と面積事象の離散量を表す減歩率式の作用素の係数とは、双対とならしめ、先に触れた両係数の和か積が生ることが分かるのである。そして、離散数学の微分積分法として捉えれば、離散的量化関数（式）の導関数として、離散的減歩率関数（式）が導かれたことになっているのである。

これでもって、

『我は数理を知ると共にこれを愛しつつあるのである。』

の心持になれたのである。

もう一度、私の理性の定義の抛り所を記すと、遠くギリシャの哲学者であるアリストテレスの『理性は、神が魂に点火した光なり。』から、神は、自然 魂は、徳として捉えれば、『論理、審美、倫理、の研究』が、『統一せる活動』となし得、数式なるものが何かを、直視できたのである。

そうすることで、数式に、数式の数式たる、魂が宿り、数式が光ると思えたのである。

夏目漱石の『心』に

『言葉が、空気に波動を伝えるばかりでなくもっと強い物にもっと強く働き掛ける
ことが出来るからです。』

これは言葉が言霊と成すことであり、【量化】なる言葉の定義が判決により下され
たので、【量化】は言魂と鳴り、その波動は、「私の情念」を打ち碎き、『郷』の情
念』の理性が、より大いなる統一の『是認の情念』の理性となって往くだらう事を
願って、「私の情念」も霧消させたい。

追伸

『京』に『哲学の道』と名づけられた散策路がある。

私は、『数学者』と自然科学や社会科学に携わる『科学人』が現象を等式で考察する時、
『数学者』のは、理性であり、『科学人』のは、量化であると思惟する。

この道を、私は、「量化の道」と念じつつ歩いている。